

富士山信仰について

(未完)

編集: 佐薙 恭

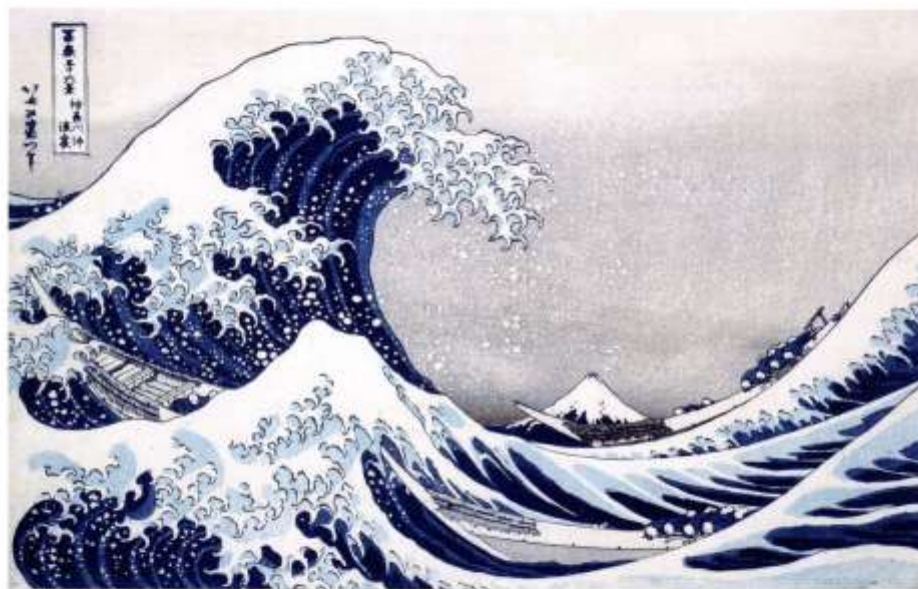
2014年6月

世界遺産 富士山



富士山—信仰の対象と芸術の源泉

Fujisan, sacred place and source of artistic inspiration



葛飾北斎／富士三十六景 神奈川沖浪裏（山梨県立博物館蔵）

神聖で荘厳な姿の富士山は、山城から山頂への登拝及び山麓の霊地への巡礼を通じて、富士山を居処とする神仏の霊力を獲得し、自らの擬死再生を求めるといった独特の性質を持つ富士山信仰を育み、また、海外の芸術家にも影響を与えた浮世絵など、多くの芸術作品に取り上げられてきました。

この信仰の対象・芸術の源泉である富士山は、世界でも高く評価され、第37回世界遺産委員会において世界遺産（文化遺産）に登録されました。（平成25年6月）

富士山世界文化遺産登録推進両県合同会議

山梨県・富士吉田市・身延町・西桂町・忍野村・山中湖村・鳴沢村・富士河口湖町
静岡県・静岡市・沼津市・三島市・富士宮市・富士市・御殿場市・裾野市・清水町・長泉町・小山町

富士山信仰・三つのステージ

1. 山は遥拝の対象・登らない時代
2. 限られた人が修験道の道場として登り始めた時代
3. 多くの人たちが信仰の対象として登り始めた時代

第一のステージ

- 山麓の縄文時代の遺跡・・・石の配列など 遥拝の形が残されていたという
- 初期の浅間神社・・・神殿がなく富士山そのものを遥拝する形になっている・・・山宮浅間神社

第二のステージ

- 富士山に最初に登った人
 - 伝説 その1 聖徳太子 598年
 - 伝説 その2 役行者 8世紀
 - 修験道の開祖といわれる人
- 誰かが確かに登ったことが判る文章
 - 文人 都良香が書いた「富士山記」 9世紀
- 末代上人 12世紀 村山口から数百回登り山頂に「大日寺」を建てた・・・村山修験
- 村山修験は戦国時代 今川義元の厚い庇護を受けた

第三のステージ

- 多くの人が信仰の対象として登り始めた
- 富士講の開祖 長谷川角行(16～17世紀)
- 富士講は江戸時代中期 6代目 食行身禄(1670～1733)の行動により 江戸の庶民を中心に爆発的に広まる
- 神仏混淆だった富士講は維新後 神道化し 山域からは仏教色は一掃された
- 富士講は戦前まではかなり活発だった

聖徳太子の富士登頂伝説

- 太子は甲斐の国から献上された四脚の白い黒駒を神馬と見抜き 試乗すると 馬は天空に舞い上がり 富士山を越えて信濃の国に達して三日で都に帰着したという(598年)
- 917年 堤中納言藤原兼輔がまとめた「聖徳太子伝略」による
- 伝略に基づき多くの「聖徳太子絵伝」が画かれた 現存する最古のものは東京国立博物館蔵の国宝 もともとは法隆寺絵殿を飾る障子絵だった

聖徳太子絵伝の一部分



秦致貞

1069年

国宝

役行者の富士登頂伝説

- 役行者(別名役小角)は7世紀末実在の人物
大和の葛城山で修業 呪術を行ったが人々
を惑わしていると讒言され伊豆の国に流罪
- 伊豆では夜 海上を走って渡り富士山で修業
をしたと伝えられている
- 後世 富士山だけでなく ひろく修験道の開
祖と見なされ尊崇の対象 広く語り継がれる



川端龍子による
行者道三部作



その1 ・その2



川端龍子による
行者道三部作
その3



国指定重要文化財
富士曼荼羅図 (富士宮市・富士山本宮浅間大社蔵)

16世紀中頃の作品

狩野元信 印

浅間神社

- 主に富士山が見える地域に約1300社 総本宮は富士山本宮浅間大社(富士宮市) 主な神社は9世紀 富士山の噴火を鎮めよとの朝廷の命により設立された 祭神ははじめ「浅間大神」 江戸時代頃から「木花開耶姫」
- 世界文化遺産 富士山の構成資産には山麓の浅間神社 8社がリストされている
- 富士山8合目以上の土地は浅間大社の領域
- 山頂には奥宮が2社

山宮浅間神社(その1)



山宮浅間神社(その2)



山宮浅間神社(その3)



富士宮市 歩く博物館 Mコース⑧

山宮浅間神社

美しい富士山も、ある時期突如として大爆発を起こし、人々の生命財産を奪う恐ろしい山であった。その火を噴く不思議な力を人々は畏敬し、山そのものを御神体として祀り、噴火の度に富士山を拝み、朝廷でも山の神の位を上げ、使いを派遣して富士を拝ませた。その富士山を拝んだ場所が山宮浅間神社だと考えられている。

山宮浅間神社には本殿がなく、いつのころか、この神社に神様を祀る本殿を建てたいと村人が本殿造りに取りかかった。しかし、上棟式までこぎ着けたとき、大風が起こつて吹き倒されてしまった。こゝうしたことが何度か起こり、「山宮浅間神社に本殿を造ろうとすると、風の神の祟りがあるので本殿を造つてはいけない」というようになった。

こうした伝承に託して、昔の人々が古い信仰の形を今に伝えてきたのである。

富士宮市教育委員会

富士山本宮浅間大社(その1)



富士山本宮浅間大社(その2)



現在の社殿は1604年徳川家康により造営された

富士山本宮浅間大社(その3)



富士山本宮浅間大社(その4)



富士宮本宮浅間大社(その5)



国指定特別天然記念物

湧玉池

この池は霊峰富士の雪解けの水が
熔岩の間から湧き出るもので水温
は摂氏十三度、湧水量は一秒間に
三、六キロリットル（約二〇石）
年中殆んど増減がありません
昔から富士道者はこの池で身を清
めて六根清浄を唱えながら登山す
るならわしになつております

つかふべき、数にとらむ

浅間なる御手洗川の

そこにわくたま

平兼盛

湧玉池



富士山本宮淺間大社奥宮



富士吉田市の金鳥居



北口本宮浅間神社(その1)



北口本宮浅間神社(その2)



北口本宮浅間神社(その3)



村山浅间神社(その1)



村山浅间神社(その2)



富士宮市 歩く博物館 コース⑥

村山浅間神社

平安時代末、僧末代が富士山を山岳修行の場として選び、富士修験の元を開いた。鎌倉時代には、僧頼尊が村山で富士行を創始したといわれ、村山の地に富士修験が定着した。村山浅間神社は、富士修験の道場として大日堂（興法寺）を中心に発展してきた。室町時代以降、周辺にいくつもの坊がつけられ、村山口富士登山の基地として、山伏（修験者）を先達とした多くの富士道者（登山者）を集めていた。また、登山期間が終わると、山伏が各地を回って火伏せや虫封じ・安産などの祈禱をしたり、お札を配つたりした。明治維新の排仏毀釈や、登山道の付け替えで、村山浅間神社は衰微してしまつたが、今も大日堂と浅間神社を合わせて祭る神仏習合の姿をとどめている。また、水垢離場や護摩壇なども残され、昔を物語っている。

富士宮市教育委員会

2008.04.17

河口浅间神社



藤原角行(1541~1646)

- 末代上人によってひらかれた山岳修業を「富士講」として全国に広めた
- 18才の時 奥州で修業中 役行者のお告げで富士へ行けと言われる
- 西麓の人穴でのきびしい修行 靈力を身につけ 蔓延していた疫病を治したりして 名を江戸庶民の間に広めた
- 不眠の不行 1万8千8百日 断食300日 富士登山128回 お中道33回 製字360字 内八海 外八海の巡礼など

角行修行の地・人穴(その1)



人穴(その2)



食行身禄(伊藤伊兵衛)(1670~1733)

- 江戸中期に富士講を広めた人物 17歳の時富士講と出会う 始祖角行から数え6代目を名乗る
- 身禄の信仰の基礎は「正直 慈悲 情け 不足」で 心の中に平安な世界を生み出し 地上天国を作ろうとした
- 63歳の時 当時の幕府の政策に抗議の形で富士山烏帽子岩で断食入定 即身仏となる
- その際弟子に説き聞かせたものが「三十一日の巻」となり これが人々の共感を得て 江戸八百八講と言われるほど 莫大な数の講を生む原動力となった



葛飾北齋 富嶽三十六景 諸人登山

富士山北口女人登山之図



歌川芳幾 1860年

John Rutherford Alcock

The Capital of the Tycoon



1863年

富士講の人々(その1)



富士講の人々(その2)



世界文化遺産構成資産

- 25項目がリストされている そのうち第1項目富士山域は9件を含んでいる この9件を分解して独立させると $24+9=33$ 件となる この33件を要素ごとに分類しなおすと
- 水関連14件（富士5湖 忍野八海 白糸の滝）
- 浅間神社8件 ・山頂遺跡と4登山道で5件
- 山麓の信仰関係5件（胎内樹型2 御師宅2 人穴） ・三保の松原1件

御師について

- 御師は富士山の神霊と崇拜者の間に立ち崇拜者に代わって祈りあげ お札を配り 登拝(信仰登山)の際は自宅を宿泊所として提供し富士信仰を広める役割を果たした人々
- 室町末期には御師の存在が記録にある
- 江戸時代の最盛期には約100軒ほどの御師が吉田に居住していた
- 身分としては神職で苗字帯刀が許されていた
- 登山期以外は各地で富士信仰を布教
- それぞれ特定の富士講を檀家としていた

御師宅(その1)



御師宅(その2)



御師宅(その3)



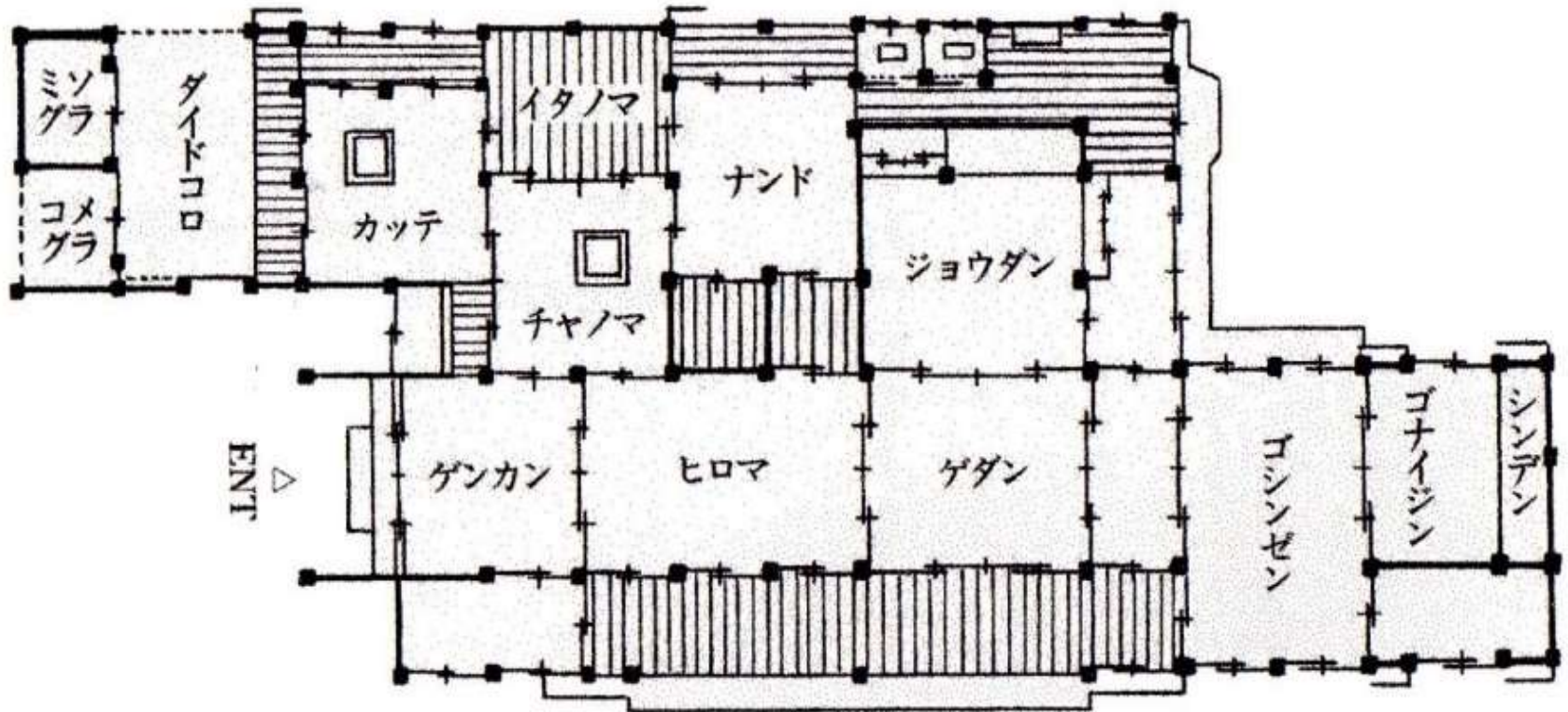


御師宅(その4)



御師宅(その5)

御師宅(その6)



小佐野家住宅の間取り